

未来型図書館をともにつくる！

こまつリビングラボ

【令和6年度第5回 開催報告】

1

開催概要

- 日時 : 2025年2月2日（日）13:30～17:30
- 開催場所 : 小松市役所 7階会議室
- 参加者 : 91名



3

対話内容

対話 みんなで描こう！
リビングラボのロードマップ！

これまでの取り組みを振り返るとともに、中長期的な目線で、リビングラボを通して取り組みたいテーマや活動を挙げながら、「リビングラボ」とは何か言語化する。

2

プログラム

1. 挨拶
（宮橋市長・野末教授（青山学院大学・リビングラボコーディネーター））
2. 基本計画策定の進捗状況について&これまでの振り返り
3. ミニ講演
「安岡美佳先生のみんなに聞いてみたいこと！」
（安岡准教授（デンマークロスキレ大学））
4. トークセッション
「リビングラボのこれからについて語り合います！」
（宮橋市長・野末教授・公立小松大学 杓谷教授・安岡准教授・九九谷代表 吉田氏）
5. グループワーク
「みんなで描こう！リビングラボのロードマップ！」
6. 全体共有・講評
7. まとめ・記念撮影

今後のリビングラボの活動や
目指す姿を
皆さんと一緒に描きました

第5回 こまつリビングラボの開催フロー

みんなで描こう！リビングラボのロードマップ！

未来型図書館づくりを考えるための
ショートレクチャーを実施します。

- ①【これまでの振り返り】
事務局
- ②【安岡美佳先生の
みんなに聞いてみたいこと！】
安岡美佳准教授



ショートレクチャー・ミニ講演

【リビングラボのこれからについて語り合います！】



これまでの取り組みを踏まえ、
未来に向けた方向性を
トークセッションで語り、
共有します。

(登壇者)
宮橋市長×野末教授
×杓谷教授×安岡准教授×吉田氏

トークセッション

- 事務局作成の「リビングラボのロードマップ（案）」をもとに、
中長期的な目線で、リビングラボを通して取り組みたい
テーマや活動を挙げながら、「リビングラボ」とは何か言語化していきます。



自己紹介

グループワーク

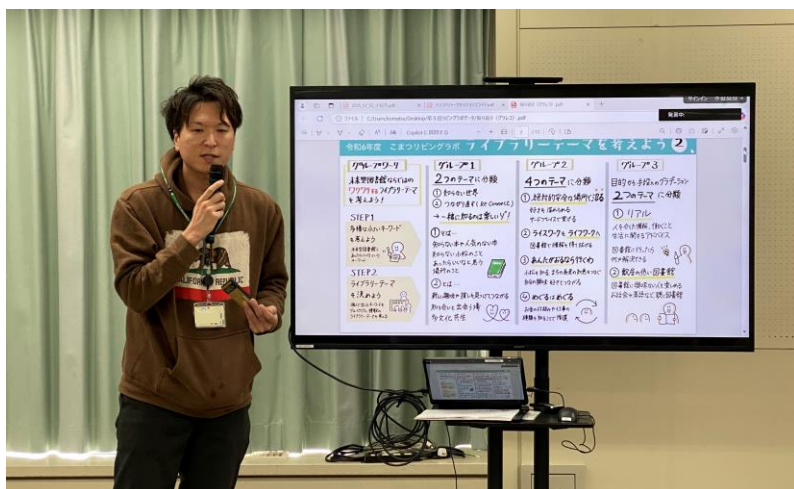
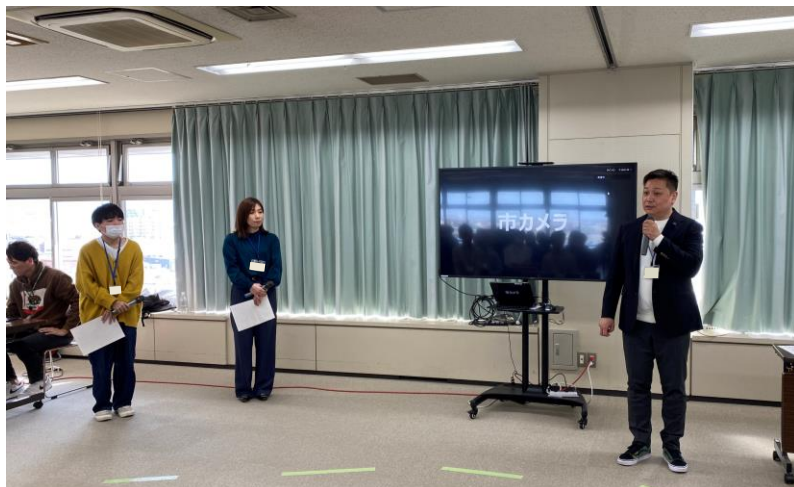
リビングラボの未来の具体化と言語化

共有

講評



開催の様子 (1)



開催の様子 (2)



ミニ講演「安岡美佳先生のみんなに聞いてみたいこと！」



■ 登壇者：安岡美佳デンマークロスキレ大学准教授

東京都杉並区で生まれ育ち、2005年にデンマークに拠点を移して以降、20年間コペンハーゲンに住んでいます。北欧に渡ってから参加型デザインという手法の研究を続けており、参加型デザインのメソッドの一つがリビングラボです。2023年の5月に小松市からメールをもらったことがきっかけとなり、小松市やこまつリビングラボとの関係がはじまりました。

小松市とこまつリビングラボはなぜ魅力的なのか？

小松市のリビングラボなぜ面白いのか、素晴らしいのかについて、私なりにまとめたポイントが3つあります。1つ目は「**自律した市民**」(リビングラボの参加者の多さや、地域のアクティビティの盛んな様子)、2つ目は「**明確なビジョン**」(市長の掲げる公約等)、3つ目は「**優秀な熱意ある人たち**」(熱意のある人たちが連携して一つのプロジェクトを進めている)です。

→安岡先生がリビングラボを説明する際に紹介する、デンマーク・コペンハーゲンのアパートの水害対策の時に生まれたリビングラボの取り組みのワンシーン。



リビングラボとは何か？

「リビング」は実生活の場で、「ラボ」は試しながらモノやコトをつくっていくこと、つくり続けるといった意味があり、そのプロセスをひっくるめて北欧ではリビングラボといっています。

・ 参加者

リビングラボでは、参加者は特定の一部の人ではなく、市民やユーザー、自治体、研究機関、システムを開発するような人たちが等が、自分の何らかのスキルを持って集まり、課題解決や価値創造を目指します。

・ アウトプット

リビングラボでは、長期的な視点で積み重ねを行っていくことが鍵になります。他の人の意見を聞いて、ある人の考え方が変わっていくなど、複数の人がディスカッションしながらお互いが少しずつ変化していくことで、当初見えていたものではない、新たなアウトプットを創造していくことが可能となります。

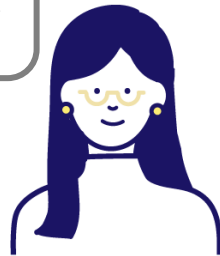
ミニ講演「安岡美佳先生のみんなに聞いてみたいこと！」

安岡美佳先生のみんなに聞いてみたい質問

～小松の魅力を解き明かす～

Q「小松のどこが好き？」

たくさんあって選びきれないのですが、小松には海もあって山もあって自然を楽しめるところが好きです。10分くらいで海にも行けて、木場潟に行けば白山を見ながら散歩が楽しめて、どこか旅行に行ってもやっぱり小松が良いなと思います。



【大学生】

この質問は、「**シビックプライド（地元愛・郷土愛）**」を調査するために使われる質問です。シビックプライドは、地域やコミュニティに対して感じる誇りや愛着のことを指し、地域の歴史文化、イベント、自然環境、そして住民同士のつながりなどから生まれます。郷土愛が高いと地域社会への参加意識が高まり、コミュニティがうまくつくられると理論的にはいわれています。

安岡美佳先生のみんなに聞いてみたい質問

～なぜ小松でリビングラボが機能するのか～

Q「コミュニティのイベントや活動はありますか？」

私は去年5月に仕事の関係で小松市に引っ越してきました。一番驚いたのは、自治会などでほぼ毎月のようにイベントがあることです。子どもがいるので参加しているのですが、企業や酒屋さんが参加していたり、みんなでバーベキューをしたりとこれまでの地域ではなかった文化が存在していることに驚いています。



【市民】

「**強い紐帯・弱い紐帯**」という考え方があるのですが、人間関係がコミュニティの充実や人々のQOL（生活の質）を高めるためには重要で、強いものも弱いものも必要といわれています。強い紐帯があることで、コミュニティ内の結束力を高め、長期的な協力関係を築くのに役立つ一方で、関係性が閉鎖的になってしまうマイナス面も存在します。弱い紐帯があることで、新しい情報やアイデアをコミュニティにもたらし、創造性や革新を促進させることができるといわれています。

ミニ講演「安岡美佳先生のみんなに聞いてみたいこと！」

その他講演のポイント

「Public Space（公共空間）」について

- 「**Public Space（公共空間）**」とは、一般の人々が自由にアクセスでき、利用できる場所のこと。
- 具体的には、公園や歩道、広場、図書館が挙げられる。
- 公共空間がきちんとデザインされていることでコミュニティの絆を強め、住民の**QOL（生活の質）**を向上させる役割を果たすといわれている。

リビングラボは誰が主導するのか？

- **トップダウンとボトムアップ**の両方が必要。
- ボトムアップでの誰かの「やりたい」を起点とした小さなアクティビティがたくさん存在し、かつトップダウンでサポートする仕組みが存在することが重要。
- リビングラボはやりたいなと思った人が始めるもの。そのなかで**どういった人たちを集めてくるか、どういうプロセスを踏んでいくか**というところがその後のプロセスにおける鍵になる。

リビングラボには箱（部屋等）が必要か？

- リビングラボにおいてはコンセプトが重要だが、**箱（部屋や建物）はあってもなくてもどちらでも良い**。
- みんなが集まって公園をお散歩するといった全体のこと、そのアクティビティをリビングラボと呼ぶこともある。
- 一方で、場所があることでみんなが集まれる、そこで何かのアクティビティが生まれる、アクティビティが行われるので行ってみようという気になるという視点もある。
- 場所がある方がうまく機能するかもしれないため、そういった姿を未来型図書館でみてみたい。

リビングラボに重要なのは当事者である？

- リビングラボの参加者として、**当事者やテーマに対して課題感を持っている人**は入っていないてはならないステークホルダーの一つ。
- 市民の参加も重要であると同時に、自治体や大学が参画していることも重要。
- **様々なスキルを持った人を集めて運用していく**ことがリビングラボでは重要である。



トークセッション「リビングラボのこれからについて語り合います！」



■ 登壇者：

- ・ 宮橋市長
- ・ 青山学院大学教授 野末俊比古氏
- ・ 公立小松大学教授 杓谷茂樹氏
- ・ デンマークロスキレ大学准教授 安岡美佳氏
- ・ 九九谷代表 吉田良晴氏

安岡先生のミニ講演を受けて

さまざまな人が集まり対話を通して何かを生み出していくカタチが面白いのではないかという仮説から、こういった対話の場をまちづくりに活かすべきだと考え取り組んできました。未来型図書館だけではなく、イノベーションファシリテーター講座のような対話の場をリードする人材を育成しようという取り組みも並行して進めています。そうしたなか、「小松をつなげる30人」という一般社団法人の立ち上げが市民の中で動きだしています。こうした動きが、これからの小松の当たり前の文化になっていくと良いと考えています。そして、その息吹が確実に出てきていると感じています。



- ・ 行政ができることは**舞台づくり**であるといえるのではないかと。
- ・ 市長がおっしゃったような枠組みが、小松という地域の社会に根付いていることが大きいと思う。

【安岡准教授】

- ・ 小松には住んでいる人たちが**外から来る人を排除せず受け入れて活発に活動する**すごさがある。
- ・ 私はよく路地裏という言葉を使うが、老若男女が集まって交流する場所をつくりながら小松のシビックプライドを高めていく可能性を感じた。

【杓谷教授】



【宮橋市長】



トークセッション「リビングラボのこれからについて語り合います！」



- 小松のように、海も山もあり中心地が平らであるというのはなかなか珍しい地域なのではないか。
- **移動がしやすく、人間関係がフランクであるというところが小松の魅力**だと思う。

【野末教授】

リビングラボとは何か、未来型図書館とはどのようなものか、他に任せる部分もあれば、自分が参加して創造できるワクワク感もあります。また、安岡准教授のお話を聞いて、リビングラボはこのような進めていって参加したら良い、ライトな気持ちで良いという安心感を抱きました。また、その**根幹にあるのは、QOL（生活の質）**だと感じました。生活の質を高めたいという思いはみんな一緒だと思います。未来型図書館を通じて創造を重ねながら具現化し、みんなで小松の質、自分の生活の質を上げるきっかけ、場、出会いになっていくことを楽しみに感じています。



【吉田氏】

リビングラボの将来や展望について



- さまざまなテーマで取り組んできたが、そのテーマに対して想像しているものを簡単に乗り越えられたと感じている。
- 対話を通して**地域の課題解決につなげていける可能性がリビングラボにはある**のではないかな。

【宮橋市長】

未来型図書館の検討において、未来型とはそもそも何かという議論もしているのですが、そのなかで「未来型」という言葉は、大事にしないでならない重要な言葉だと感じています。開館後の5年後に本当に未来型でいられるのか、私はやはり20年後30年後も「未来型」といえる施設であってほしいし、それを実現させるには若者の存在が大きいのではないかと思います。**世代間の中で受け継いでいくもの**もあり、それが**常に未来を見据えるような発想をしていく**必要もあるでしょう。そういったかたちでリビングラボが続いていくことで、この施設も未来型であり続けると思います。



【杓谷教授】

トークセッション「リビングラボのこれからについて語り合います！」

小松にとって**大学があることも重要なポイントであり大きなメリット**であるといえます。

今日は小学生も参加してくれていますね。毎回様々な世代や職種の方々が参加していますが、中高生は部活動などがあり、参加が難しいという状況がありました。そこで、市は全中学校や近隣の高校に行って出張リビングラボを行っています。**世代を超えて丁寧に育てて進化させていくことの大事さ**を感じました。



【野末教授】

これからは活動などが柔軟に広がってほしいと願っています。一緒に協力してできあがっていくものなので、みなさんが友人を誘ったり、また市の方でのリソースづくり、舞台づくりを行うなど、**簡単にみんなが参加できるような取り組みなどがまだまだできる余地がある**と思います。初めの一步を踏み出すことはなかなか難しいものです。そのサポート環境があることで100人、300人、500人、10万人に活動の輪を広げていくことができるのではないのでしょうか。



【安岡准教授】

- こういった場に参加できることが、すでに当事者の感覚を得ることにつながり、取り組みの輪が広がっていくきっかけになる。
- **市民のみんなと意見を出し合いながら組み立てていくこと自体が未来型である**といえるのではないかな。



【吉田氏】

未来型図書館noteでは、トークセッションのより詳細な内容を公開しています。是非ご覧ください。

(URL : <https://komatsu-city-library.note.jp/n/n65ec35f76902>)



グループ 1



「リビングラボ」とは(定義) コミュニケーションをすることにより、世代・地域を超えた新しい出会いとご縁をつなげる仕組みをつくり、次世代の！ヒトとコトのつながりを創造するウラ日本小松！

各段階のポイント

[～現在]これまで参加してきて感じたこと

- ・ 参加者は、垣根を越えた交流を通じ、未来型図書館に対する熱い想いや一体感を実感しています。多様な視点やグループでのディスカッションにより、未来への期待と市民主体の施設づくりの意識の高まりが感じられました。

[設計・建設段階]取り組みたい活動

- ・ 市民の意見を反映したイベントや展示、記念アートの制作などを通じ、地域の歴史や文化と未来型図書館への期待を形にする取り組みなどが提案されました。

[開館準備]取り組みたい活動

- ・ 工事現場を実際に見学する見学会や、バーチャル見学会など、リアルとバーチャル両面を取り入れた体験型プログラムで未来型図書館の魅力を広くPRすることなどが提案されました。

[開館]取り組みたい活動

- ・ 開館後は、市民協働型展览会や小松人の本棚、ドローンショー、ウォークラリーなど、地域文化と創造性を融合したイベントで、夢や想いを実現する取り組みが提案されました。

「リビングラボ」とは(定義)に込められた思い

これまでのリビングラボで育まれた人とのつながりやコミュニケーションの価値が共有され、今後も世代や属性を超えて「ご縁」が広がり続ける場でありたいという思いが込められています。

「リビングラボ」とは(定義) 気軽に未来をずっと考えられ、目的を見つけ続けられる場所

各段階のポイント

[～現在]これまで参加してきて感じたこと

- 参加者は、行政と市民が近い環境の中で、シニア層を含む幅広い世代の対話が進み、意見がしっかり取り入れられている安心感と、次なる目的や課題の発見がありました。

[設計・建設段階]取り組みたい活動

- 居心地の良い自習室の設置や、市民プロデュースによるイベント、サブカルチャーの視点も交えた発信が提案され、リビングラボの継続運営や公園での対話の場づくりが期待されています。

[開館準備]取り組みたい活動

- 情報の見える化を通じ、施設の進捗や魅力を発信することで、準備段階から参加しやすい仕組みづくりが求められました。

[開館]取り組みたい活動

- 開館後は、未来を常に考え続けられる場所として、市民が主体的に交流し、持続的な発信と創造が実現される運営が期待されました。

「リビングラボ」とは(定義)に込められた想い

集う人々が「気軽に話しかけても大丈夫」と感じられる安心感のある場をイメージするとともに、「未来型」という言葉が、小松市にとって常に「未来」であり続けるよう願いが込められています。

ワーク結果

グループ3

未来型図書館を共に創る！こまつリビングラボ
第5回「リビングラボの小松モデルを考えよう！」

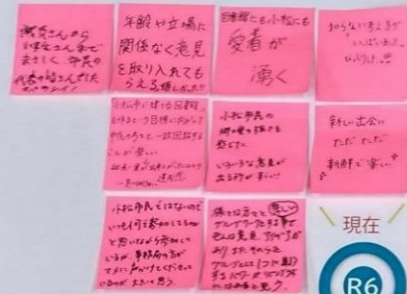
グループワークシート

わたしたち・小松市にとって「リビングラボ」とは
～安心な環境で、イキイク活動する多様なわたしたち「ニッカリビュウホ」の場～

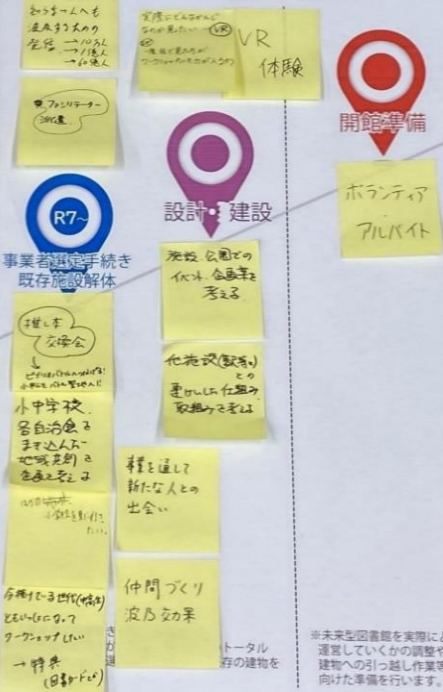
グループ
3

※できるだけ文章で記載

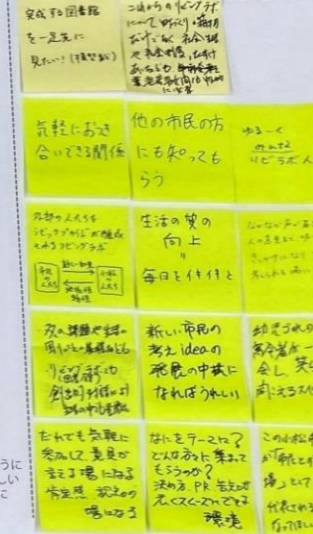
これまでリビングラボなどに参加してきて感じたことなど
(付箋の色：赤色)



いよいよ、設計・建設の段階に！
みんなで取り組みたい活動などについて考えよう！
(付箋の色：黄色)



・みんなで取り組みたい活動 (付箋の色：黄色)
・リビングラボの目指す姿や役割 (付箋の色：緑色)



※未来型図書館を実際にどのように運営していくかの調整や、新しい建物への引っ越し作業等開館に向けた準備を行います。

「リビングラボ」とは(定義) ～安心な環境で、イキイキと活動する～多様なわたしたち「こまつリビラボ人」の場

各段階のポイント

[～現在]これまで参加してきて感じたこと

- 参加者は、小学生も交え幅広い市民が集い、年齢や立場を問わず意見が尊重される中で、図書館や町への愛着、郷土愛を実感しました。新たな出会いや対話型の創造プロセスが、みんなのワクワク感を生み出しています。

[設計・建設段階]取り組みたい活動

- リビングラボの発信力を高めるため、VR体験やファシリテーター派遣、推し本交換会など、市民・学校・地域団体が連携する共創イベントが提案され、仲間づくりや波及効果に期待が寄せられました。

[開館準備]取り組みたい活動

- ボランティアやアルバイトといった、より積極的な参加を通じ、現場をサポートしながら、準備のプロセスをより身近に感じられる仕組みづくりが求められました。

[開館]取り組みたい活動

- 完成した図書館を一足早く体験したいとの声がありました。また、リビングラボが施設づくりだけでなく、地域の助け合いなど社会制度を考える場にもしたいとの提案がありました。

「リビングラボ」とは(定義)に込められた思い

一文では表せない思いが「こまつリビラボ人」という言葉に込められています。「こまつリビラボ人」はここにいる人や、まだ言葉やかたちにできないことも含む概念です。

ワーク結果

グループ4

共に創る！こまつリビングラボ
第5回「リビングラボの小松モデルを考えよう！」

グループワークシート

わたしたち・小松市にとって「リビングラボ」とは



「リビングラボ」とは(定義) 共感を生む、リアルに→もっと知りたい、やりたいが生まれる→
新しいゆるいコミュニティができる(ストリートピアノ的)→いつでもそこにある場

各段階のポイント

[～現在]これまで参加してきて感じたこと

- ・ 参加者は、地域とのつながりを実感しながら、図書館の使いやすさや具体的な魅力について真剣に議論しました。世代を超えた多様な人々がそれぞれの希望を語り合い、「小松愛」の熱量の高さを改めて感じる場となりました。

[設計・建設段階]取り組みたい活動

- ・ 建設期間も楽しみながら待つ時間となるよう、VR体験や音楽フェス、庭づくり、「別れと出会い」をテーマにした大人向けのビブリオバトルなど、多彩なイベントが提案されました。

[開館準備]取り組みたい活動

- ・ 日々の変化を記録するプロジェクトや、みんなで館内ルールを考える企画が挙がりました。また、期間限定の移動型遊園地といったユニークなアイデアも提案されました。

[開館]取り組みたい活動

- ・ 開館後には、「テーマ配架バトル」や、図書館・博物館の「ともだち会員」制度など、市民が主体的に参加できるユニークな取り組みが構想されています。これらの活動を通じて、まちづくりや交流の拠点として、夢や悩みを共有できる場を目指します。

「リビングラボ」とは(定義)に込められた思い

どれだけ自分ごとになるのかについては、まだわからないとしつつも、「やれることは始めよう！」「みんなが見える形で実現しよう！」という姿勢を共有し、その思いが込められています。

グループ5



「リビングラボ」とは(定義) つながる+つくる+循環する、させる=こまつの未来

各段階のポイント

[～現在]これまで参加してきて感じたこと

- 参加者は、自由な議論を通じ、小松への愛着と未来型図書館の具体的ビジョンを感じていました。多様な世代が集い意見を交わす中、創造的なアイデアの連鎖が印象的でした。

[設計・建設段階]取り組みたい活動

- 設計段階では、子どもや若者を積極的に巻き込み、リビングラボが運営の核となる仕組みを明確化する提案が出されました。図書館と博物館の連携や、具体的な設計プロセス、設備・交通手段の改善など、利用者目線の意見が盛り込まれました。

[開館準備]取り組みたい活動

- 開館準備では、eスポーツやPR動画作成などのプログラムで、進捗を発信するアイデアが提案されました。段階ごとの見学ツアーも市民との連携を深める工夫として挙がりました。

[開館]取り組みたい活動

- 開館後は、施設を超えたまちづくりの拠点を目指す提案がされました。SNSや産官学連携を活用し、持続的に人が集まる交流と進化の場を実現する意欲が示されました。

「リビングラボ」とは(定義)に込められた思い

建物の完成後も自由に集まり、話せる場としてのリビングラボは継続的なプラットフォームになることが大切である、との強い思いが込められています。

グループ 6



「リビングラボ」とは(定義) 小松につながるみんなの想いを未来につむいでいく場

各段階のポイント

[～現在]これまで参加してきて感じたこと

- 参加者は、図書館や博物館の枠を超え、多様な意見が交わされる「理想のこまつ」としての未来型図書館に期待を寄せています。世代を超えた熱い対話の中で、新たな発見が生まれ、小松の魅力を改めて実感する場となりました。

[設計・建設段階]取り組みたい活動

- 解体や建設の様子を追体験できるVRやドローン中継などのアイデアが提案されました。公会堂など旧施設への感謝を共有し、新たな小松への期待を高める取り組みが挙がりました。

[開館準備]取り組みたい活動

- プレオープンとしての見学会や、図書館前での屋台・キッチンカーイベントなど、市民が進捗を楽しみながら体感できる仕掛けが提案されました。開館前から未来型図書館の魅力を広く伝え、期待感を高める工夫が求められています。

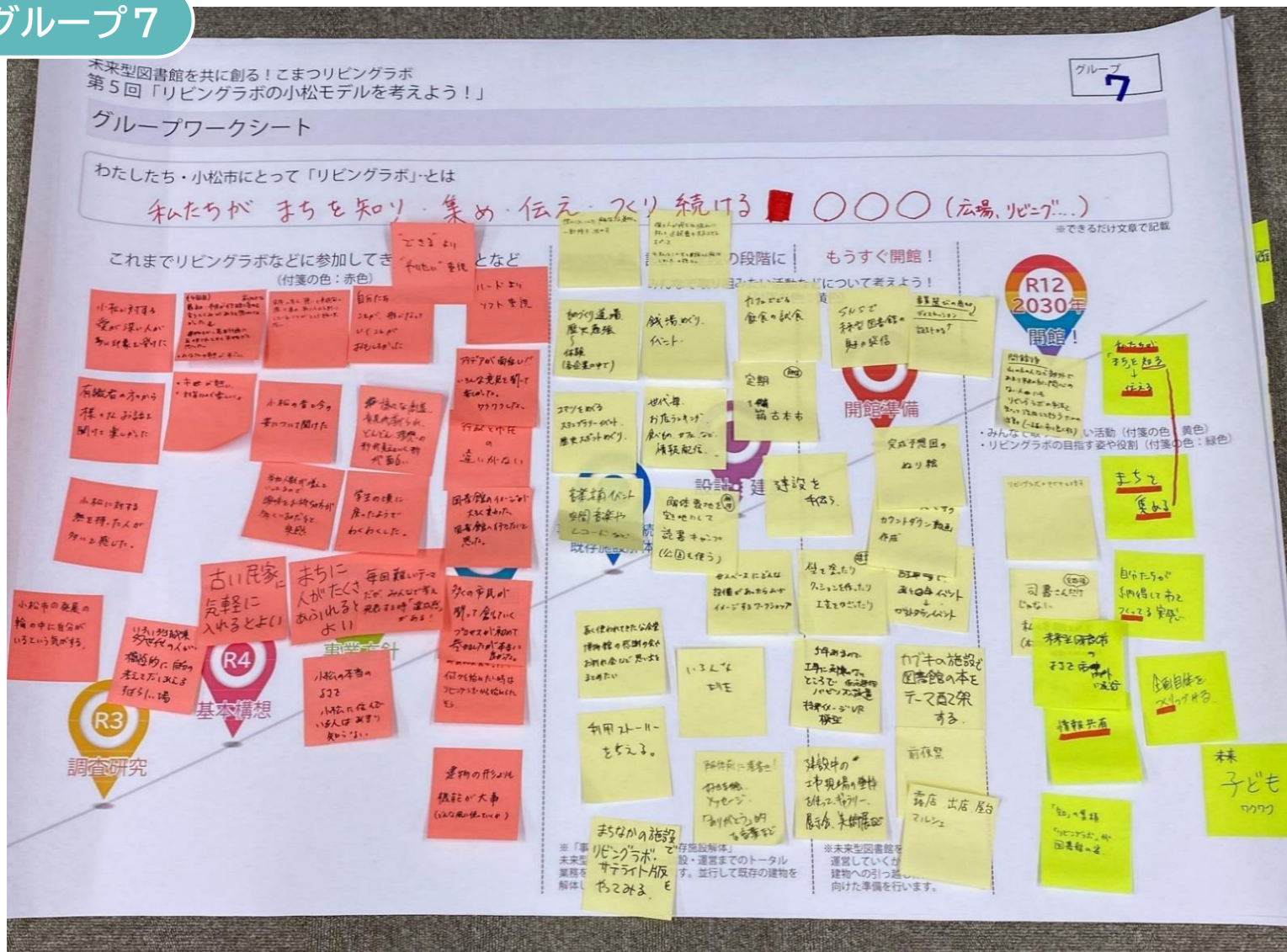
[開館]取り組みたい活動

- 開館後は、目的がなくても訪れたい「ワクワク感」を大切に、ビブリオバトルなどの常に新たな発見と交流が生まれるイベントを展開していくことが提案されました。

「リビングラボ」とは(定義)に込められた思い

「幅広い世代の方々が継続的に利用しやすい場をどう作るか」「未来の子どもたちへどのように引き継げるか」といった問いに対して向き合っていこうという意志が込められています。

グループ7



「リビングラボ」とは(定義) 私たちがまちを知り・集め・伝え・つくり続ける〇〇〇(広場、リビング…)

各段階のポイント

[～現在]これまで参加してきて感じたこと

- 参加者は、小松への深い愛情を共有し、行政と市民が対等に意見を交わせる場に感動していました。多様な声と熱意が、未来型図書館の可能性と期待へとつながってきています。

[設計・建設段階]取り組みたい活動

- 親しまれてきた建物の一部を残して活用する取り組みや、工事の様子を追体験できる企画が提案されました。また、カフェの試食会や各スペースの設備を考えるワークショップなど、運営における協働や連携につながるアイデアも挙がりました。

[開館準備]取り組みたい活動

- SNSを活用した情報発信に加え、未来予想図の塗り絵や前夜祭など、リアルな体験と地域の魅力を前面に出す企画が提案されました。市民の期待を高める工夫が求められています。

[開館]取り組みたい活動

- 開館後は、リビングラボの軌跡の記録や「私の本棚」スペースなど、未来型図書館を市民の交流とまちづくりの拠点とする取り組みが提案されました。未来を共に創る場として、多彩なイベントの開催が期待されています。

「リビングラボ」とは(定義)に込められた思い

施設づくりだけではなく、ずっと先の未来にかけて自らがどのようにまちに関わりを持ち続けられるかという考えが共通認識としてあります。また、既存のかたちに限らない不定形の何かという意味を込めて「〇〇〇」という表現を入れています。

第5回の結果まとめ

2030年の未来型図書館の開館を目指し、リビングラボ自体も市民のみなさんと共に創り、共に育てていくため、「バックキャスト」の視点を大切に、リビングラボを通じて取り組みたいテーマや活動、将来像、大切にしたい価値観についてロードマップとしてとりまとめました。今回、作成したロードマップは、今後の企画・実践の重要なツールとして活用し、次年度以降においても常に更新し続けていきます。

